心地よい生をもとめて 21世紀のライフデザインへ

鈴木 七美（すずき ななみ）
民博 先端人類科学研究部

心地よい生はどのような要素から構成されるのかということに思いを馳せるようになった。そのきっかけは、子どもたちが昼休みには、いったん家に帰って昼食をとる習慣が生きているスイスのザンクトガレン州で、福祉施設で用意された弁当を地域の高齢者へ自転車で配達する子どもたちの暮らしに触れた時である。スイスには自宅に住み続けることを望む高齢者を支援する「シュピテックス」というシステムがあるが、それに加えて、ここでは高齢者と子どもたちがゆったりと時を共有できる工夫がされていた。

昼食に帰宅した男の子〈スイス、グラップス、1999年9月〉

●ウェルフェアからウェルビーイングへと……

その後、多文化主義を掲げるカナダで、様々なエスニシティや宗教の人々が利用する高齢者用住居・施設において、多様な要望に応えるためのアウトリーチやボランティア活動に出会った。

外部や他の世代の人間も参加して、民族文化を表現する活動や食事メニューなど具体的なテーマが議論される。参加する者すべてが意見を述べることができる。そしてこのように開かれた議論の場が保証されていることは、街全体のつくりにも反映されている。

これらの試みは、ウェルフェアと呼ばれてきた社会制度としての福祉のみならず、ウェルビーイング（心地よい生・幸福）の実現に向けた継続的調整を協働作業として実践してゆくことと深く関わる。

したがって、これらに関する研究では、少子高齢社会における問題への対処を提示することには留まらない。すべての年代の人々の暮らしや人生観を問い直す基礎的研究と現場の実践に関する応用的研究とを並行させて実施することが重要となる。

●新たな対話とネットワークへ

そこで私たちは、領域を横断する学際的研究と、研究者・実践者を包括するグループによる研究を組織した。現在は、民博の共同研究「ウェルビーイング（福祉）とライフデザイン」と科学研究費プロジェクト「少子高齢・多文化社会における福祉・教育空間の多機能化に関する歴史人類学研究」を連動させて進めている。

二〇〇九年二月二八日と三月一日には、共同研究の初年度成果公開として、国際研究フォーラム「ライフデザインと福祉（Well-being）の人類学」を立命館大学で開催した。ここでは、高齢者、子どもたち、障害者などの利用に適した施設・空間の多機能化とその問題に取り組む現場からの報告があった。施設の機能として想定されていたことからはみでる部分を明確化することにより、人間の生を総体的に向上させるための基礎的知見と現場での応用可能な情報を提示した。

一般市民も含めて約一四〇名が参加したこの二日間のフォーラムを通して、次世代を見据え、専門分野や特定地域を横断する新たな対話やネットワークを醸成する次なる試みに繋げてゆけたらと願っている。

国際研究フォーラム（第Ⅳセッション「技術と障害者から始まるコミュニティ・デザイン」）〈2009年3月1日〉

専門は歴史人類学・医療社会史。ユートピア・コミュニティ、オルタナティヴ教育・医療など、ライフデザインの思想と実践を追っている。著書に、『癒しの歴史人類学』（世界思想社、二〇〇二年）、『出産の歴史人類学』（新曜社、一九九七年）などがある。